

カテゴリー 交流促進、その他

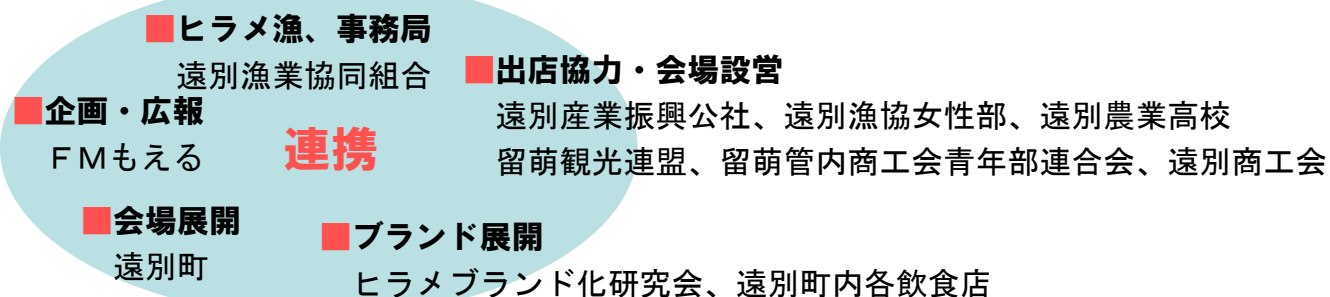
活動名称 ヒラメ底建網オーナーin遠別

ルート名称 萌える天北オロロンルート

## ①活動概要

日本海に面し、地場でとれる魚介類の質の高さは定評があるが製品のブランド化には遅れを取っている状況下において、都市と地方の交流はもとより、地域で更なる活動展開(まちづくり、経済など)すべく、底建網船三隻を一口10,000円総数120名でその日とれた魚を配分するオーナー制を実施するもの。

## ②活動の体制



事業実施に向けたプロジェクト会議風景



FMもえる・遠別農校生による受付風景

## ③苦勞した点や工夫した点

地元「自分たちの事業である」と認識してもらうことが最も大切である。

【苦勞した点】→ 萌える天北オロロンルートと、遠別漁協の一部、FMもえるの志を、まずは地元役場や、漁協内に意識を広げることを第一義としたこと。

【工夫した点】→ FMもえるを介し、広くマスコミに情報展開したことと、全国からの応募により、外部からのレスポンスを地元を広めることに注力したこと。

## ④活動の効果

ルート内での地場産品のブランド化について先進的な取り組みとなり、また市町村の枠を超えて連携したことにより、様々な意見アドバイスを得られた。漁業者は、誇りを抱き『漁』という暮らしぶりが、訪れた方たちから光と映ることで、最も効果的な付加価値を作ることができた。このことは、安定的な魚価や経済循環とともに、地域への愛着や誇りを醸成し、地域が抱える後継者問題への明るい兆しへとつながる。

## ⑤今後の活動予定等

ブランド力に磨きをかける研究会と情報共有することにより、本イベント期間のみならず、夏のドライブシーズンの代名詞となるような個人消費型の観光展開を誘引し、ルート各所における独自の滞在型、寄り道型の形成をめざす。



船長とオーナーが直接触れ合い新鮮な海の恵みにひたる

様式2 (★指定・候補ルート共通)

ベストシーニックバイウエイズ・プロジェクト2010

ルート名	萌える天北オロロンルート	
活動の名称	ヒラメ底建網オーナー in 遠別	
活動期間	平成20年度～平成22年度	
評価の視点 ※相当すると思われるものに○ (複数選択可)	指 定	①活動の持続性、②活動の地域への浸透・波及、 ③ルート運営の基盤強化、④ブランド形成・活用、 ⑤人材育成の充実 ⑥その他シーニックバイウエイ北海道の推進への寄与
	候 補	①活動目的・内容の分かりやすさ、②ルートとしての目標の共有、 ③幅広い参加、連携への可能性(地域住民、各種団体、民間、行政等) ④シーニックバイウエイ北海道の活動として今後の展開可能性(地域資源の発掘・活用、人材の発掘・育成、活動の継続等)
1. アピールポイント		
<p>●経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小平町タコ箱オーナー制度の集客に触発され、遠別漁協が「もっと良い魚(ヒラメ)をPRしたい」と考えた。</li> <li>・<u>潜在する需要と地域の力量を“つなげる”</u>ことで<u>地域を活性</u>することを目的としている萌える天北オロロンルートの活動団体の中で、企画イベントを得意とするFMもえると遠別漁協が融合したことがはじまり。</li> </ul> <p>●効果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年目を迎え、遠別町では商工会、飲食店が主となり『<u>ひらめのブランド化</u>』に対する動きがあり、近隣町村でも各種オーナー制度やB級グルメに取り組まれるようになった。</li> <li>・本プロジェクトがこうした『<u>シーニック発!</u>』の<u>留萌地域全体の起爆剤</u>となり、情報や手法、効果などをお互いに共有したことで<u>活動の持続性</u>が保たれ、<u>地域への浸透・波及</u>が進んだ。</li> </ul> <p>【アピールポイント】</p> <p>①地縁の深さ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・萌える天北オロロンルートが各地団体を融合できたのは、地区幹事制で運営されているためである。遠別の担当幹事(副代表)が遠別漁協と強いつながりを持っていたという地縁の強さの結果であること。</li> </ul> <p>②地域の力量</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめは、事業の企画運営を得意とするFMもえるが事務局を担い、金銭的なリスクを回避し、段階的に地元の運営度合いを高めたこと。</li> <li>・3年目は、遠別漁協が完全に主体意識を持ち、まち全体で全国のお客様を受け入れるだけでなく、地元も一緒に楽しむイベントとなった。</li> </ul>		

### ③全体を巻き込む

- ・当初の目的でもある、遠別のヒラメを全国にPRすることと、意外に地元知られていないヒラメや地元の漁港を住民に身近に感じてもらうことができたこと。
- ・1年目から継続して、地域の各団体（遠別漁協・遠別役場・遠別農業高等学校・遠別振興公社など）を巻き込み、多くのボランティア（50人程度）がイベントを支えている。
- ・また、北海道（留萌振興局）や、留萌開発建設部（マリンビジョン）とも連携し、管内地域全体を巻き込むイベントとした。

### ④農商工の連携

- ・プロジェクトにより、船主の漁業者の生産意欲向上と産物に対するアイデンティティや付加価値の向上が図られた。
- ・これが安定的な収益になるための活動として、農商工連携の足がかりになっていること。

### ⑤ルートのノビシロ

- ・萌天の地区幹事制は、ルート全体で様々なプロジェクトを提案できる柔軟性と展開力を兼ね備えている。
- ・しかし、それにはまだまだ研究と実践が必要なことも多々あるがゆえに、ノビシロの広さを感じ、歩みは遅くても、時間をかけて萌える天北オロロンルートにあった手法をとっていること。

## 2. 創意工夫、苦勞した点

- ・地元「自分たちの事業である」と認識してもらうことが最も大切である。
- ・萌える天北オロロンルートと、遠別漁協の一部、FMもえるの志を、まずは地元役場や、漁協内に意識を広げることが第一義とした。
- ・そのため、広くマスコミに情報展開することと、全国からの応募により、外部からのレスポンスを地元を広めることに注力した。

## 3. 前回からの改善、向上させた点 ※（受賞実績のある活動のみ対象）

- ・1年目は、FMもえるに事務局をおいたが、2年目は遠別町役場、3年目は遠別漁協に移し、FMもえるには分室をおく程度となり、道補助金申請文書作成も事務局で担うなど、**人材育成の充実**を図った。
- ・前回の状況からオーナーが前日入りする点に着目し、前回までの後夜祭を前夜祭に変更したことで、オーナーの参加が増え、船長との交流がより深まり、**ホスピタリティを向上**させることができた。
- ・イベントの人気の高まりを受けて、漁船を3隻から4隻に増やした。新たな漁船には若手の船長を抜擢し、地元の元気さをアピールするとともに、4人の船長によるバトルを演出することで、より一層イベントを盛り上げた。加えて、オーナー募集枠も拡大するなど、イベント規模を拡大した。